

このお便りは私が担当している太極拳教室のみなさんに毎月お届けいたします。

今月のトピックス

落澤師範が全日本武術太極拳選手権大会にご出場

清新鶴の会で指導されている落澤徹師範はさる7月15～17日に東京体育館(千駄ヶ谷)で開催された全日本武術太極拳選手権の『24式太極拳B(40～59歳の部)』に東京都代表として出場し、惜しくも入賞は逃しましたが、写真のような華麗な演武を満場に披露しました。

江戸川区の幹事に選任されました

日本健康太極拳協会東京都支部の理事改選にともなって、従来江戸川区の幹事をされていた落澤徹師範が新たに「理事」に就任されました。これにともない、松浦美恵子師範と私、茶木登茂一師範が江戸川区の幹事に選任されました。楊名時健康太極拳の普及のために今後とも微力ながら尽くしたいと思いますのでよろしくお願いいたします。



健康妄語録

「記憶する心臓」とは？ ——臓器移植の話・その3——

不治の難病で心臓と肺の同時移植手術を受けたアメリカの女性、クレアシルビアの手記「記憶する心臓」は大変ショッキングな内容です。移植手術が無事に終わり麻酔から目覚めた彼女は、自分のところの中に他人が入り込んでいることに気づくのです。やがて事態はどんどんはっきりしてきます。飲んだ事もないビール、嫌いなピーマンやチキンナゲットが好きになってしまうのです。そればかりではなく、性格が男性的になり、性欲の異常な亢進にも悩まされます。彼女は結局バイク事故で死んだドナーの青年の戸籍を探し当てて彼の家族と会い、ともどもに、その青年が彼女の中に生きていることを確認しあうのです。彼女の手記はアメリカでも評判になり(連邦議会の公聴会にも出席しているほどです)他の移植患者と交流するようになりましたが、同じような体験がつぎつぎと語られ、心が心臓に宿っている不可思議な重い事実を全米の市民に突きつけたのです。(手術は1988年、手記の出版は1998年)

進化論の観点から見てもこれは当然だという説を西原克成医学博士は唱えています*。つまり原始的な腔腸動物からだんだんと脊椎動物に進化する過程で、既に腸が「考え」、腸から分化して出来た肺と心臓が「考える」、のは当然で何の不思議もないというのです。『ドナーが仮に色情狂だったら移植された人は色情狂になります。色彩の好みも、食物の好き嫌いも、色情の好みもすべては、腸管の吸収と排出能力の好みなのです』と明言されております。(※「内蔵が生みだす心」NHK ブックス) また、日本で最高の心臓外科医として有名な南淵明宏先生も、著書「心臓は語る」(PHP 新書)の中で、クレアのケースはありうることで、「医学的にありえない」のではなく、「医学的にはわからない」というべきだとも、また「心臓というのは単に体を動かす臓器の一つではなく、いのちそのものだ」とも述べておられます。

さて、3回にわたって脳死者からの臓器移植に対する疑問と懸念を述べてきました。しかし現実には法律を改正したいと強く求めている人もまた少なくはありません。現行法のままでは1万人を超える待機患者を救うことが出来ないという「人道的な」観点からです。しかし、偶発的に、かつまれに起こる脳死というものを前提とした臓器移植ははたして医療行為と言えるのでしょうか。また、いつ起きるか分

からない他人の不運な、不幸な事故などをひたすらに待ちつづける待機患者やその家族の気持と言うのはどう理解したらよいのでしょうか。法改正の急先鋒である河野太郎衆議院議員はいみじくもこう語っています。「中国で死刑囚から臓器の提供を受けた日本人もいるし、東南アジアでの臓器売買*といった課題も浮かび上がっている。日本人の問題は日本国内で解決すべきだ。」(2005.05.27 朝日新聞)

だからといって、「脳死を人の死」にしてよいのですか?というのが私の終始変らぬ疑問なのです。

* 発行人注;臓器売買については生きたまま腎臓を売るなどのケースのほか、最近では子供がドナーに無理やりさせられている(当然殺されて!)ケースがあるようです。つまり世界各地で年間何十万人もの、主として幼児、子供が誘拐されたり、親から安く買いとられたりして人身売買市場に出されていることは周知の事実ですが、これらの生贄は 古典的な売春市場(日本を含む世界中の)へ売られる 欧米などの幼児性愛者へ養子などの名目で売られる(男女を問わず!) 僻地などで将来の嫁として買われる(中国でいう“とんやんしー童養媳”)そして④ドナーとして使われる——のようにさまざまな用途!?!に利用されているのです。特に最近では、世界的に絶対的に不足していると言われる「子供のドナー」の供給財源の一つになっているのではないかと懸念がひそかに囁かれています。

旅をうたい拳を詠む

7月末に友人6人とシルクロードの旅をしてきました。私にとっては29回目の中国、そして3回目のシルクロードです。敦煌の莫高窟、鳴沙山、遠く足を伸ばして、はじめて訪ねる玉門関、河倉城、陽関、西千仏洞。さらにはウルムチに飛んで、長駆トルファンへ走り、40度を超える炎熱の砂漠の中の、交河故城、高昌故城、ベゼクリク千仏洞、火焰山、蘇公塔などを巡る7日間の旅でした。



陽関の西の彼方にはろばろと絲綢の路のかすみゆくなり 【河倉城・前漢時代の兵糧基地跡】

炎日に玉門関は白く燃え緑の疏勒河そろくが遠くかげろふ

玄奘が説法せしとふ僧堂もたださらさらと砂に崩れる (高昌故城)

オアシスの村は水路の早走りと葡萄を揺らす風に涼しき

トルファンの風の谷とふゴビ灘タマリスクの胡楊みな傾きて立つ

遊印遊語 衆志成城

ご承知のように、師家の楊名時先生は去る7月3日彼岸へ旅立たれてしまわれました。本部道場会館(楊名時太極拳記念会館)の9月30日の完成を目前にしてのことで、誠に残念でなりません。

この『衆志成城』と言う言葉は先生が今から30年も前の1976年(昭和51年)に道場の建設基金の積立を初めて呼びかけたとき以来、繰り返し、繰り返し、用いられてこられたものです。途中バブルで用地の確保が困難な時期などもあったようですが、ようやく先生の永年の夢が、まさに『衆志成城』——多くの仲間が志を合わせれば立派な城を作ることが出来る——によって実現するに至ったわけです。しかし、なんとと言っても先生の高潔で強靱な持続するご意志がなければ到底実現出来なかったことです。こういうことを思い廻らしながらこの印を彫ってみました。 合掌

